
優等生で問題児

紅場シキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優等生で問題児

【Nコード】

N2432Y

【作者名】

紅場シキ

【あらすじ】

ある日幼馴染みに殺された！？
殺された理由は神が間違えたからだとか
能力もらって転生のテンプレだ
異常で過負荷で優等生で問題児で正義で悪な
主人公が送る物語

第0箱（前書き）

初投稿なので駄文があると思いますがよろしくお願いします

第0箱

「知らない天井だ」

とうとうか一面真っ白だった

なぜこんなところにいるか考えるがわかる

「死んだんじゃないよ」

後ろから聞こえてきたので振り替える

そこには小さい女の子もとい幼女がいた

「幼女じゃないわ!」

心を読まれた!

「当たり前じゃワシは神じゃからな」

神ねえ、で、その神が何の用だ?

「うむ、お主を間違えて殺してしもうてな」

なるほど、死因は?

「やけに落ち着いておるのう、まあよいお主の死因は幼馴染みによる刺殺じゃ」

・・・あいつが、ならいいや

「ム、良いのか? 殺されたんじゃないぞ?」

良いさ、だって幼馴染みに殺されたとかかなり非常識だろ?

「そ、そうか・・・まあお主がよいならよいのだが」

それよりまだあるんだろなんか

「そうじゃったお主に転生させてやろうと思ってな」

転生か、どんなところだ?

「お主の世界にあつたためだかボックスというところじゃ」

めだかボックスか力は?

「もちろんつけてやろう、ほれ好きなだけ言うがよい」

じゃあオリジナルの過負荷で『否常識』（ノットルール）と『穴埋め』（メイクアップ）だ

「ふむ、どんな能力じゃ?」

否常識のほうは否定する能力で穴埋めのほうは否定したところに別の
もので穴埋めする能力だ

「なるほど、大丈夫じゃほかに？」

あとは見ただけで全てを理解できる目をくれ

「わかったのじゃこの目を使いたい時に念じれば見れるようにして
おこう」

ありがとうもういい

「もうよいのか？」

いやもう十分チートいやバグだよ

「わかったそれじゃ送るぞ？」

ああ頼む

すると光が集まってくるそれに包まれるとそこには神だけしかいなかった

こうして主人公の転生生活は始まった

第1箱

どうも転生者の悲惨可憐ひさん かれんです

3さいです。ん？飛びすぎ？いやいや光に包まれたあと赤ちゃんだったんだよあとはわかるでしょそれで3さいまでは記憶を否定していました。

今病院に向かっています。なんか急に性格が変わったからびっくりしていたけどほかにもあらゆることでできて恐怖が出てきていますね目で見ましたww

あっ着きましたねまあ演技でもして普通に見ようかな？
待ち時間二時間だと！しかたないか

キングクリムゾン！

とまあ次は俺のぼんですそれじゃあ扉を開けて

「隣の晩ごはーん！」

「へっ？なにになに！」

中に居たのは幼女でした

「どうも悲惨可憐です。3さいです！」

「えっ？ああ可憐ちゃんね」

そういえば忘れてました性別は男の娘・・・間違えた男の子だ見た目まんま女の子だけだね

声は田村ゆかりを想像してくれ

「お父さんとお母さんは？」

「トイレに行ったきり戻ってこないですよ？」

「っ！そうなの」

「まったく捨てるにしても捨てかたを考えて欲しいですよ」

「君は自分が異常だとわかってる？」

「そりゃあここに來てるのだからあたりまえだろ」

「まあいいや、終わりでしたらおいとまさせていただきます」

「ちょっと待って、どこに帰るの？」

《どこでもいいだろう。》

そう言ってそのまま立ち去った

残された医者、人吉瞳は先程の少年の事を考えていた。確かに容姿や声は異常だが他のところに異常はあまり見て取れなかっただが、最後に発したあの一言が異常さを全面的に押し出させた常識が螺子曲げるどころかそれが正しいかのように思えた。あの子いままでの子とは格が違うあの子には絶対に勝てない！
そう思う瞳の目は恐怖が宿り体が震えていた

第2箱

どうも転生者の悲惨可憐です今日から中学生だぜ
またとんだ？ 気にすんな特に何もなかったから
にしても暇だね何か面白いことねーかな

【新入生代表 球磨川禊さんお願いします】

…は？ 嘘だろここで原作介入しなくちゃいけないのかまいつか

『えー』 『モブキャラのみなさんこんにちわ。』

グシャッ

ブツちよつと笑っちゃったぜ

『どうしました個性なきみなさん』

『怪我はありませんかその他大勢のみなさん』

『気分が悪いのなら早く帰った方がいいですよもう出番のないみなさん』

あーハッハッハアハアハあーハッハッハヒーヒー

もうだめだおかしすぎるしかもそのまま退場してるしどーすんのこれ？

【えー多少問題が起きましたですが次に進めます】

そのまま続けた！ やるきあるなあ

このあとはつまらないので

キングクリムゾン！

始業式が終わって帰っている今校門

『やあ』

はいいきなりきました原作介入

「何ですか？」

『君は僕の過負荷をくらっても普通どころか笑っていたからね』

『どんな子か気になってね、思ってたより普通かな？』

「そうですか球磨川君は物凄く最低だねそれじゃ帰るね」

『うん、また明日とか』

球磨川君に背を向けて

ザクッ

「はい？」

あれれえ？ 螺子が刺さっている

「はあ、球磨川君？ 何の冗談だい」

『あれ？ 過負荷にならない？』

《球磨川君？ 釘を刺しとくけど。》

《君では俺に勝てないよ？》

言いながら刺さっている螺子を抜くそこには傷がなかった

『君も過負荷だったのか劣等感が出てないからわからなかったよ』

《俺は異常であって過負荷だからな^{プラス}》

『矛盾してるけど君らしさが出てるみたいだね』

球磨川はくるっと踵をかえし帰っていく

『あゝあ、また負けちゃった』

《ふう、やっと終わった》

そう言って自分の家に帰って行った

第3箱（前書き）

どうも投稿者の紅場シキです

今回は主人公が自己紹介するシーンを入れて書きました戦うシーンは原作開始からにします

第3箱

やあ皆、転生者の悲惨可憐だよ

球磨川君とお話したあとは特に何もなかったんだけどね？おやすみなさいしたらね？

目の前にいるわけよ

「やあ、こんばんは」

「こんばんは、それであなただは誰ですか？」

「僕かい？僕は安心院なじみ親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「わかったよ安心院さん？」

「君は僕に喧嘩を売っているのかい」

《《して欲しい事をしないのが俺の中の常識だぜ》》

「可愛い顔して面白い事を言うね」

ため息をつき次の言葉と言う

「君は僕にかてるのかい？この7932兆1354億4152万3223個の異常と4925兆9165億2611万0643個の過負荷合わせて1京2858兆0519億6763万3865個のスキルを持つ僕に？」

《《フッフハハアーハッハッハ》》

「何で笑っているんだい？」

《《勝てるね》》

「なんだって？」

《《勝てると言ったんだたった1個の異常とたった1個の過負荷で前に勝てると言ったんだ》》

「君はいったい何者だい？」

《《俺か？俺は異常で過負荷で正義で悪で優等生で問題児なただのバグキャラだよ》》

「フッフやっぱり君は面白いね僕のスキルが効かないからね、どん

な子か見てみたかったんだよ。」

《お前から見て俺はどうだった？》

「最初見たときは周りと変わらないグズに見えたけど喋り方を変えた途端に勝てないと自覚させられたよ」

《そうか》

「で？結局君のスキルはなんなんだい？」

《教える訳がないだろう？》

「まあいいか、勝手にさせてもらうから」

と近付いてけて俺の顔に自分の顔を近付けて！キッスしてきやがったやられたこいつには口写し（リップサービス）があっただったまあスキルのほうは問題ないがな自分に害になるものの効果を否定してるからな……..
……..
おいいつまでするきだ無理やり引き剥がすちよつとびっくりした顔をしてる

《残念だったなスキルが使えなくて》

「っ！わかってたのかい？」

《いやいきなりキスされたのはびっくりだがスキルを使おうとしたのはわかった。》

「はあファーストキスだったのにな特に意味がなくなっちゃったな」
《ファーストキスって俺もだがお前はそんなこと歳でもないだろう？》

ピキィイ

「なんだい？文句があるなら言ってもいいよ。大丈夫僕は心が広いからね」（ニツコリ）

《いっいや特にないんだがまっまあファーストキスなら俺も嬉しいな》

「そっそうかい／＼／それならそれでいいんだ、ん？もうそろそろ起きる時間だよそれじゃまた」

《ああ、また》

第3箱（後書き）

安心院さんにフラグを建てました

とういかこの主人公に釣り合うキャラ安心院さんしかいなくね？と思ひ安心院さんにしました次はまた時期が飛ぶと思ひますごめんな

さいm（ ）m

また次回も見てください

第説箱（前書き）

どうも紅場シキです
今回は紹介するだけです

第説箱

悲惨 可憐

ひさん かれん

性別 男（男の娘）

性格 非常識

理知的

容姿 髪と肌はあり得ないくらい白い

外見は美少女これでもかかってくらしいの
声は相変わらず田村ゆかり

本作品の主人公。いつもは女っぽい喋り方をするが《》になると男らしいというか上から目線になる。非常識な事が大好きで進んであり得ない事もする。それでも普段品行方正でいろいろ部活等にも参加して才色兼備等とも言われる

異常 『穴埋め』（メイクアップ）

否定したところのを穴埋めする能力
小説内ではまだ使われていない

過負荷 『否常識』（ノットルール）

全てを否定する能力
球磨川にやられた傷はこれで否定した
主人公はこの能力を使い死を否定しているので死なない痛覚も否定している
ので痛みはないだから刺されてもあっさりしていた
もちろん否定した分穴埋めされている

第説箱（後書き）

また話の途中などでいれるかもしれません

第4箱

どうも転生者の悲惨可憐です。

中学三年生になりました（＾Ｏ＾ゞ

あれからいろいろあって大変だったね

男から告白されたり、安心院さんと学校でお話したり、男から告白されたり、球磨川君とお話したり、二年生になって破壊臣こと阿久根高貴君に襲われたり男から告白されたり、あとは変態に妹にならないか聞かれたな、あと男から告白されたりしたよ

そんなことがあって早2年今全校生徒の前にあります☆ミ

なぜかって？生徒会に入っただよ

今横にいるよみなさん

ん？始まるみたいだよ

『どうも会長に就任した球磨川禊だよ　よろしくね』

『それじゃ高い方からお願いね』

「副会長に就任した安心院なじみだよ親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「書記に就任した黒神真黒ですよろしく」

ん？次かぁどうしよまゝ面白い方がいいよね

《会計に就任した悲惨可憐だよ私達が決めた事は絶対だからしっかりやってね、あとは私を敬いなさいよろしく☆ミ》

ウインクしながら言ってみた

みんな惚けてる間に阿久根君が自己紹介を済ますつまらない子だな役職と名前しか言わないなんて、まあいいか手を降りながらステージを降りるまあ上場だね

キングクリムゾン！

いきなりごめんね生徒会挨拶から少し経っただけけど男子からの告

白が絶えない絶えないまったく私のどこがいいんだろ

「そこんとこどう思う？」

「いきなりどうしたんだい？」

「ん？男子からの告白が絶えなくてね？私のどこがいいんだろ？って思ってるね」

「男の子なのにそんな容姿とそんな声してるのがいけないと思うよ」「まあわかってるけどさ？どんなに可愛くても男だよ？」

「この世界には同性愛というものがあるんだよ」

「私にそっちの気はないからなあ」

「フフ、それじゃ私なんてどう？」

「安心院さん？うん可愛いよねそれにある意味だと一番釣り合えると思うよ？」

「へっ？意外に素直に言うね」

「むうゝそこまで狼狽えないな」

「年上だからね、年上の余裕だよ」

「自分で年上って言ってるよ？」

「君は気にしないんだろ？」

「まあね」

「ん？そろそろ起きる時間だねもう少し話していたかったのに」

「また明日があるよ」

「そうだね♪あっそうだ」

そう言って近付いてくるそしてまた前のようにキスをしてくる・・・
・・・長い・・・
・・・クチュ

「んっ！」

しっ舌を入れた！

「クチュクチュ・・・んっ・・・クチュクチュ・・・んっ・・・
ふっ・・・ぷはっはあはあ」

ヤバイ今顔が大変なことになってると思う
きっと恍惚とした表情で力が入ってない

「フフ、興奮した？」

「あっ安心院しゃんにやにしゅるの」
舌がうまく回らない

「ごめんねキスしたくなっちゃったんだよ。もう時間だからバイバイ」
「ふえ？ うんバイバイ」

ムクッ

わかってると思うけど夢の中でした

「んゝ、キス凄かったな」

多分今自分の顔は真っ赤だと思う

第4箱（後書き）

うんやっってしまったね安心院さんルートが確定したかもしれないまあいいけどまだ引き返すというか変えることができるので誰がいいとか要望があったら遠慮なく書いてください

第5箱

どうも転生者の悲惨可憐だよ♪

私は今箱庭学園に来ています高校面接です

あっ！そうそうなじみちゃんが裸君に顔剥がされちゃったんだよ。

時々夢で会ってるけど

まったく毎回毎回キス（ディープ）してくるし。なんかどんどん過激な奴になってるんだよ。

まあいいけど。今日の前に不知火袴校長がいてね話を今からするわけだ

「どうも悲惨可憐君私は校長の不知火袴です」

「悲惨可憐ですよろしくお願いします」

「可憐君？君はなぜこの高校を選択したんですか」

「選択した理由ですか？簡単ですよ、ただ面白そうだからそれだけです」

「（あまり変わったところが見られない、はずれか？）では可憐君、ここでひとつ老人の実験に付き合ってくださいませんか？」

「ん？そうですね」

少し考える素振りをみせ一言

《嫌だね》

「は？」

不知火袴は言葉を失った今のいままで普通だった者が言葉ひとつでここまで変わるのだから当然だ

「りっ理由を聞かせてもらっても？」

《あなたが望んでいるから私はやらない》

「そうですか、仕方ないですね」

と言ってサイコロを投げてくるだがまるで最初から当たらなかったかのようにサイコロがそれていく

《残念だけど俺には攻撃は当たらないぜ》

《それよりも帰っていいか？》

「（この子は絶対に異常だそれに他の異常とは比べ物にならないくらい桁が違う）」

「提案何ですが？箱庭学園の十三組にはいりませんか？登校免除に制服も自由にしてくれて構いません学費もこちらで負担します」

《かまわない、元々そのつもりでできたからな》

《それではこれからもよろしく頼むぞ》

「はいわかりました楽しい学園生活を」

第5箱（後書き）

次から箱庭学園ですね

安心院さんはちよくちよく出したいと思います

第6箱

どうも悲惨可憐だよ今日から高校一年生元気に行きたいですね
まあ否定してるから病気にはならないんだけど

そのせいか肌も髪も真っ白だからね

今の容姿は身長164cmと女の子としてみれば高めだけどくびれ
があっつかえってよく見える。むっ胸はさすがにないんだからね！
っと今回は始業式で面白いこともなく教室へGO

キングクリムゾン

ただの移動に使って意味あるのか？

まあいいや

ここが十三組か挨拶が肝心だね

「say good morning to a person!
！」

しゅしゅん

「まあこういうときもあるよね仕方ない、うん仕方ない…ぐす
さすがに反応なしは悲しいそれに

「この教室に来てる唯一の人まで無視することないよね」

その言葉に教室にいた男が話しかけてくる

「お前、俺のことがわかるのか？」

「ん？そりゃあねそれだけ存在感ばら撒いてたら嫌でもわかるよ」

「多分それはお前だけだぜ。俺はこれのせいでみんな俺のことをお
ぼえてられないんだ」

「なるほどだから私が君に気づいてないと思って反応しなかったん
だ」

「ああ悪かったな」

「いや別にいいよ。あっそれじゃ友達になる？」

「友達？そりやまたなんで」

「だって忘れられてるってことは友達がいなくてしょでも私は忘れないだから友達、どう？」

「…ああわかった俺は日之影空洞、お前は？」

「私？私は悲惨可憐、優等生で問題児で正義で悪なただのバグキャラだよ」

異常で過負荷はまだ言わないほうがいいかな？

「…？どういう意味だ？」

「まっいずれわかるよあと衝撃の事実を教えてあげよう。友達だからね」

「衝撃の事実？」

「聞いて驚け！なんと私は男だったのだ」

「は？いやいやそのなりで男はむりあるだろ」

「ムッ信じてないな、だったら」

私は空洞に近ずいて手を取り自分のモノに触れさせる

「ちよっおい、ってほんとについてるだど」

「どうだ分かっただろう」

「ああそれはわかったが、なんで女用の制服着てるんだ？」

「？趣味と正体明かした時の反応が面白いからだよ」

「そうか（あぶねえ、少し惚れかけたぜ）」

「フフッまあこれからよろしくね空洞君♪」

「ああ、よろしくな悲惨」

「むゝ」

「どうした？」

「こっちが下で呼んでるのに空洞君の方は呼ばないの？」

「え？ああ分かったよろしく可憐」

「それで良し」

このあとも永久自習なので談笑しながら過ごしました。まる。

第6箱（後書き）

空洞出しましたキャラとかは気にしないでくださいお願いします m

〔 m

次からはフラスコのメンバーでいくか悪平等の赤青黄をだすかりク
エストがあれば一言などに書いてくださいお願いします

第7箱

やあ悲惨可憐だよ

あれから一年経ち空洞君に誘われて生徒会に入りました。副会長だよエヘン

あと全部の部活と全ての委員会にも所属したよ
部活の方は予算を決めたりするのも任されてる

部員の皆にも人気だよ。男女問わず

一年生なんかでは御姉様って言うてくるのもいるし三年生でも年下とは思えないってさ

男女問わず手取り足取り教えてあげてるよ

委員会の方は次期委員長と仲良くなったよ。(^o^)^v

赤青黄とも仲良くなったよ。もちろんなじみちゃんとの関係でね

あっ次期委員長になる子たちには男の子だって教えたよ？友達だからね

雲仙君とは皆が授業受けている中廊下を歩いてたらスーパーボール投げてきたよ

まあ当たらないけどね♪

雲仙君驚いてたねあの顔は可愛かったね

まあ人にいきなり投げつけてくるのはあけないからねO ☆H A

☆N A ☆S H I してあげたよ？

それから友達になっちゃった。

空洞君は不良をボコボコにしてるみたいだけどそれじゃダメだと思う。まあ来年めだかちゃんがんばるとかしてくれるでしょ

大刀洗切子ちゃんとはお昼寝友達だよ

十二町矢文ちゃんは日々本の良さを語り合ってるよ

そのせいかはわからないけど微妙に視線が熱いような気がする男だって教えた時も嬉しそうだったから

他のところは特にないかな

今回喋ることがなかったけどいろいろあった事がかけたからいいかな？

それじゃ、また明日とか。

第7箱（後書き）

今回は原作開始までの関係を作ることが出来ました

前回のヒロインをリクエストしてくれた君に届けさんありがとうございます

ざいますm（　）m

これからよろしくお願いします

第8箱（前書き）

やっと原作開始します
今回はあの王様との戦い？です

第8箱

「世界は平凡か？」

平凡であって非凡だよ

「未来は退屈か？」

退屈だけど楽しみだよ

「現実 is 適当か？」

適当だけど精密にできてるよ

「安心しろ、それでも生きるのは劇的だ！」

というわけで毎度お馴染み悲惨可憐だよ

やっとな原作開始したということ

始まりのシーン所謂プロローグから入ってみたよ

いやぁ本当に楽しみだよまぁ私が介入するのは雲仙君が抜けたあと
だけだね

それまでは適当に過ごそうかな

キングクリムゾン

今なんとなくで中庭に来てみたけど失敗した

「おいお前」

「ん？なに？」

「王が話かけてやったというのにその態度」

『跪け。』

「嫌です」

「ほう、なかなかやるな、ならば」

『ひれ伏せ』

《煩い》

「なに！？なぜ言葉の重みがきかない」

《煩いと言っているだろ【喋るな】！》

「!?」

否定して穴埋めした能力を使ってみた
この能力は言霊といい言葉が力になる

《まったく先ほどから聞いておけば自分が王だと?はっ!お前の力
は発信することだろ?王になれる奴の力じゃねんだよ》

「」

《なんだと!?って感じだな》

《お前から仕掛けてきたんだ覚悟しろ》

そう言っって一歩近づく相手も一歩下がる

《おいおい逃げるなよ【動くな】》

すると相手は動かなくなる

俺は自分の半分位の大きさの釘を出す

《釘を指しとくぜ》

そう言っって腹に

ズシャ

突き刺したそのまま地面に磔にする

《どうだ?痛いかな?次いくぞ?》

そう言いながら手足に釘を刺す

今は相手の死を否定しているので死なない

しかも気絶することも否定しているから気絶できないので痛みが続

きつづける

《そういえば話せないようにしていたな》

言霊を解除する

「がっグアアアア」

《ほらどうした?まだ足りないか?》

肝臓があるところに釘を刺す

「グアアアアアアアア」 あ

あっ壊れた

目が死んだ。

《なんだもう壊れたのかつまらん》

釘を抜いていく刺さっていたところに傷どころか服にすら穴がない
釘のほうに傷をつけることを否定したからこの釘を使えば傷ひとつ
相手につけることなく痛みに陥れる事ができる
壊れたことを否定する

《まったく面倒くさい》「けど、楽しめたからいいか」
そう言ってまた歩き始めた

第8箱（後書き）

もう戦いというよりは虐殺だね
主人公最強過ぎる
あと新能力で言霊が使えるよ
ほかにもだすかも

第9箱（前書き）

箱庭ニュース！！

始まりました箱庭ニュース司会進行は作者の紅場シキでお送りします
では早速中継の可憐さん

第9箱

こちらは今作品の主人公兼中継の悲惨可憐です

ゴゴゴゴゴゴ

今の揺れはなんでしょうか？行ってみたいと思います

キングクリムゾン

到着しました。ええあれは原作の主人公黒神めだかさんです。
誰かに暴行を加えようとしたところ仲間みなさんが止めに入った
模様です

あつ終わりましたそれでは暴行を加えられそうになっていた雲仙君
にインタビューしたいと思います

「雲仙君今の思いを一言」

「はあ？何やってんだお前」

「インタビューです。それでは一言」

「はあ・・・わかったよアイツは化け物だそれかなりのな。だが、

」
ここで少し溜める

「まだ全然悲惨のが強えな」

「ありがとうございます！」

「で？お前はどうすんだ？」

「私？ん？フラスコ計画参加しようかな」

「マジかよ、ったくお前えが参加したら止めらんねえんじゃねえか
？」

「ん？いや少し遊んであげるだけだよ」

「そうかい」

「あっ！雲仙君の階勝手に改装しちゃうけどいいよね？」

「いーぜ俺はもう参加できねえからな」

「ん、ありがと。じゃねっ！」

「ああまたな」

キングクリムゾン

はい、あのあとは家に帰りました

すぐに参加したらめだかちゃんがフラスコ計画に気づかないかもしれないからね

今は理事長室の前にいます

ガチャ

あっ、中からめだかちゃんが出てきた

「ん？おお悲惨先輩ではないですか。お久し振りです」

「うん久し振りめだかちゃん」

今の会話で分かると思うけど何故か私にたいしてだと敬語を使うんだよね

「めだかちゃん？もっとフランクにいい？敬語はいいから」

「いえ、悲惨先輩に敬意をはらうのは当然のことですから」

何回言ってもこの調子だからなあ

「まあいいか、それじゃ私は用があるから」

「はい、久し振りに話す事ができて良かったです。それでは」

そう言って入れ違いで中に入る

「おや？悲惨君ではないですか。どうしたんですか？」

「はい、フラスコ計画に参加しようと思ひまして」

「成る程、それではこのサイコロを振って下さい」

「分かりました」

と言ってサイコロを振る。結果は

236354

「もう一度振っていただけませんか？」

「いいですよ」

もう一度振る

132566

「ふむ、基礎性も特にない普通の結果ですね。貴方は本当に異常何ですか？」

「それは後ろにいる王様君に聞いた方が良いんじゃないですか？」

「気づいてましたか、それでは出てきて下さい」

そう言うのと六人出てくる

「彼らがフラスコ計画のメンバーです」

「王様君に仮面君、侍君にボクサー君、露出狂に包帯ですか。なんとも濃いメンバーですね♪」

「私は露出狂じゃない！」

「いやいやその格好で言われても説得力皆無だよ？」

そう言いながら包帯にアイコンタクトを送る

「そうたぜ古賀ちゃん。俺はてつきり趣味だと思ってたぜ？」

「違ふよ！？別に露出するのが趣味じゃないからね！」

「まあそんなことはさておきどうしたの？王様君？震えてるよ？」

「いっいや何でもない」

「本当に？」

「大丈夫だ、問題ない」

「本当に大丈夫王土？」

「大丈夫だと言っておろう」

「まあいいけどね♪それより理事長に伝えてくれない私が異常かどうか」

「ああ分かった。見ていて分かったと思うがこやつは異常だフラスコ計画に参加しても問題ないだろう。現にこの俺が傷ひとつ与えられずに敗北した程だ」

「「「なっ!？」」」

「で?理事長参加していいの?」

「はいそれほど力があるのなら此方からもお願いしたいですから」

「そうですか。では私はこれで席を立ちドアに向かう」

「あっ!確か雲仙君の階は十一階でしたよね?本人の許可は得たんで勝手に改装します」

「分かりました、費用は?」

「大丈夫です。お金はかからないので」

「分かりました、それでは」

その言葉を聞き満足して帰った

そのあとの理事長室

「あの人に僕の異常(感受性)が発動しなかった」

「それは本当ですか? (だとすると彼は発動させない用にするような異常を持っている事になる)」

「僕の殺人衝動も出なかったよ」

「それは本当ですか!？」

「うん、どちらかというと殺そうと思えなかった(・・・・・・・・)のがあるのかな?」

「成る程(今の言葉から察するには何かを拒否する異常といったところでしょうか?) 彼のことはしっかり観察しましょう」

理事長は新しい実験台を得て悪役のような笑みをこぼした

「あれ？私達空気じゃない？」
露出狂が涙した

第9箱（後書き）

主人公がフラスコ計画に参加することになりました
王土が主人公に対して恐怖の対象になってしまった
次は善吉君と阿久根君との戦闘を考えています
これからよろしくお願いします！

第10箱（前書き）

まだ戦闘シーンに入らないです

第10箱

何もない部屋というには広すぎる場所

その部屋は異常だった

色が二色しかないのだしかも黒と白の二色だけ

その部屋？の真ん中では一人の女の子のような男の子が電話をしていた

「ん、わかったそれじゃ」

ん？あつ！もう始まったの？まったく！いつ頃来るかくらい教えてよ何時もので始められないじゃん！

まったく・・・じゃ、気を取り直して悲惨可憐だよ

今はフラスコ計画を潰しにめだちゃんが視察に来てるよまあもう王様君のところだけだね

で私は十一階で善吉君たちを待ってるんだよ

王様君に電話するまで足止め頼まれたからね

しっかり敬語使って頼んでくるから笑いそうになっちゃったよ

ドタドタドタドタ

ん？来たみたいだね。どんな顔してくれるかな？君たちは？

||||||||||||||||||||

善吉 side

今俺たちはめだかちゃんを取り返すために地下に下りているそしてこの階段を降りれば十一階になる俺はここにくるまでに言われたことを思い出すしていた

――――

「とりあえずこれでワンフロアクリアだ！」

阿久根がそう言って下の階への階段に向かおうとする

「ちょっと待ちな」

高千穂が声をかける

「なっ！？ お前まだ！」

「いやさすがにもうやりはしねえよ。ただ忠告だ十一階の奴とは闘うな。」

「十一階？ なんでだよ」

「すまないが俺にはこれしか言えねえ」

――――

宗像との闘いのあと友達になりその階を下りようとする

「そうだ、友達になったし忠告しておくよ。十一階の人と闘ってはいけないよ」

「またその話かよ、一体誰なんだ？」

「ごめん。僕には教えられないでも検体名くらいなら教えられるよ。

その人の検体名は『非常識』（アブソード）だよ。」

「^{アブソード}非常識、誰なんだ一体」

――――

あの二人があんなに言う奴なんてだれなんだ？

その疑問を胸に抱きながら十一階の扉にてをかけ開ける

「なっ・・・なんだこの部屋!？」

辺りが黒と白しかない部屋の真ん中には人がいた顔が見えず近づくと徐々に見えてくる

「あっ! あんたは!」

「こちらら善吉君? 先輩に向かってどんな口をきいてるんだ」

その顔はめだかちゃんが唯一この学園で敬語を使う先輩だった俺個人としても昔少しグレて中学生デビューのつもりでオールバックにしたときにOHANASHIを受けたからな(ガクガクブルブル)

「えっ? あっはいすみません」

「それでよし、で? ここ通りたいんでしょ?」

「えっとそうです通してもらえませんか?」

「ん? ダメだね。まっ! 通りたいんなら私を倒してから通りなさい」

善吉は悟った

二人の言っていた言葉の意味を

(そりゃ闘っちゃダメだよ。だってこの人絶対に勝てないっていうのがやらなくてもわかる。というか非常識とかまんまこの人じゃん。おいおい雲仙先輩? これじゃそちらで闘ってた方が簡単だった気がするぜ? だが、ここまできたんだめだかちゃんののためにも闘わなくちな)

「分かりました、全力で行きます」

「ふふっ本当にやるんだ? それなら皆一気に相手してあげるよ」

「それは嬉しい申し出ですね」

「あら? いいの? 三体一は卑怯とか思わないの?」

「いえいえ、というかこれでも少ないですよ」

「そうかな? まあそれじゃ始めようか?」

「はい」

「さあパーティーの時間だ皆楽しく踊りましょう？」
こうして普通・特例・異常とバグの対決が始まった

その一方雲仙は

「あっ」

「どーしたん？何か忘れ物でもしたんか？」

「いっいやなんでもねえよ（確か十一階ってアイツだったよな？ヤベエいまさらこっちで闘った方が楽だったかもしれないねえなんて言えねえ）」

「ほんま大丈夫か？汗ダラダラやん」

「いや大丈夫だぜ」

今回のことはさすがに事が事だから何かひとつくらいは頼まれたらやってやろう

そんな気持ちになった雲仙だった

第10箱（後書き）

次は戦闘シーンからです
あと最低で最悪で最弱なあの人が出るよ

第11箱

これまでのあらすじ

黒神めだかを助けるために最下層を目指す善吉
しかし地下十一階には今作品の主人公悲惨可憐が待っていた
下に行くため善吉は闘う
善吉は下の階に降りることが出来るのか!?

――――

「行きます!」

善吉君が言うと同時に殴りかかってくる
拳が顔面に当たる瞬間

「どこに?」

「っ!」

阿久根の横に並んでいる
否定して穴埋めした技の一つ瞬間移動を使った

「阿久根君もかかってきなよ?」

「分かりましたよ、先輩!」

つかみかかってくるがかわして腹にボディブローをきめる

「ぐっ! ごほっごほ」

「二人一斉にかかってこないと勝てないよ? 異常らしく叩きのめし
てあげるから」

そう言う二人は前と後ろではさむように攻めてくる

「安直だね」

そう言って近い善吉君を蹴りあげて蹴りあげた善吉君をつかみ阿久
根君に向かって投げる

特例の阿久根君ならかわせるだろうからかわす時に出来る少しの隙

を狙い踵落としをきめる

「ほらほら立って立って！まだ一回も触れてないよ？」

「くっ！くそ！」

今度は二人重なるように攻めてくる

前にいる善吉君が華麗な足技を使ってくるのを掴むと後ろの阿久根君が出てきて腕を掴んで技をかけようとする

「おっ！いい攻めだね！でも残念普通だったらよかったけど私の場合異常だから普通じゃ駄目だね」

掴んでいる善吉君ごと腕を振り阿久根君に善吉君をぶつける、そのままもう一回りして善吉君を投げるもちろん阿久根君に向かって、そして善吉君と阿久根君が重なっているところにライダーキック並の蹴りを入れる

二人ともぶっ飛んで地面に当たり一人は蹴りの衝撃で、一人は地面に当たった衝撃でもがく

「はあ…全然駄目だね。それじゃ私には絶対勝てないよ？まだまだ十分の一も出してないのに…勝つ気あるの？」

「くっそ！強すぎる」

「なに言ってるの？君たちが弱すぎるのさ。まったくこんなに弱いなんてがっかりだよ二人とも寝てな」

そう言っ善吉君の顔面向けて足を振りかぶりおろす

p r r r r r

瞬間に悲惨の携帯電話になった

「ん？あっ王様君？もういいの？OKそれじゃ通すよ」
そう言って電話を切る

「よかったね二人とも！下の階に行けるよ♪」

「どういう事ですか？」

「ん？そのまんまの意味だよ？もともと王様君に頼まれて時間稼ぎしてあげてただけだし」

「何でこの計画に協力しているんですか？」

「ん？ 暇潰し？」

「何で疑問形なんですか…はあ」

「まあまあいいじゃないか！ それより早く下に行かないの？」

「あっ！ そうでしたそれでは」

「うん、頑張ってるねえ」

善吉君達が降りていったのを確認しエレベーターに乗る（此所で止まるように勝手に改造した）

ゴウンツ チン！

最上階に着いたね、球磨川君はもういるかな？

ガーンツ

ドアが開くとそこには球磨川君とまだ磔になっていない裏の六人と負け犬軍団がいた

「ん？ あら？ 球磨川君じゃん！ ヤッホー」

『可憐ちゃん…：空気を読もうよ』

「ん？ ああ今からやるの？ ならさ？ 私にこっちの六人頂戴♪」
と言って負け犬軍団を指差す

「『うん？』 『僕は別に構わないよ』」

「やった♪ それじゃ始めようか」

そう言いながら釘を出し

「^{バーティ}虐殺を」

—————

時間が経ちめだか達がエレベーターからあがってくる

ガーンツ

ドアが開いた先にあった光景は螺子と釘で磔にされた光景だった

「！？」

「えっ？ 何…何これ？」

「裏の六人が…全滅…だと？」

「チーム負け犬も：同じく全滅…？ひとり残らず？」

「なんだこりゃ：なにがあったらこんな光景になるんだ？」

「まさか相討ちにでもなったのか？」

「『いいや』『相討ちじゃあこうはならないね』」

「『十四人全員が同じように串刺しにされている』『どんなアブノーマルであろうと自分で自分を串刺しにするなんて不可能だよ』」

「これは明らかに第三者の仕業に違いないね、

しかも使っているものが違うを見ると第三者は二人だね」

「『一体どういう目的があつてこんな面白半分の惨状を演出したのかはさっぱりわからないけれど――』」

「！！ 誰だ！」

「いやいや、早とちりはいけないよ」

「『そうだよ』『僕達が来た時にはもうこうなっていたんだよ』」

「だから」

「『だから』」

「『僕は悪くない』」

「私が悪いとは思わない」

血濡れになった張り付けたような笑顔の螺子を持った少年と

この惨状には似つかわしくないほど汚れない綺麗な釘を持
った悲惨可憐だった

第12箱（前書き）

今回は長めです

第12箱

「『めだかちゃん久し振りっ』 『僕だよ』」

「――っ！ 球磨川…襪…!!」

球磨川は指をすつと前に出し

「『いや違う』 『僕は球磨川襪じゃない』 『彼の双子の弟の』 『球磨川雪だ』」

「!？」

「『なーんてね嘘嘘っ!』 『引っかかったあ?』 『たいじょーぶ正解正解っ!』 『あってるよ大正解!』 『そうです』 『僕が球磨川襪でーっす』 『いやんっ!』」

「……………いつだってすがりつきたくなくなるような嘘をつくような貴様は……………!!」

「めだかちゃん? そんなことは前から分かっている事じゃないか。今更だよ?」

「……………そうですね」

「おい人吉…誰だよこいつ」

「昔の友達だってんなら俺達にも紹介して――!!」

ガタガタ ガタガタガタ

「!?! 人吉…!?!」

ぐっ

「この男は私達の中学時代の先輩ですよお姉さま」

「かつては生徒会長を努めた男です」

「支持率0%で生徒会長になった脅威の男」

「もっともたったの数ヶ月でリコールされましたがね」

「支持率…ゼロ!？」

「そしてもう一人は球磨川が生徒会長を努めていた時に会計を務めていた更には私の一代前の元生徒会副会長を務めた人で生徒全員から絶大な人気を持っていた人です」

「やだなあめだかちゃん人の過去を勝手に暴露しないでよ。まっそんなことより善吉君ってば女の子に庇われちゃって情けないよ？ 禊君フォローしてあげて」

「『うんそうだね』『善吉ちゃん？』『情けなくてもいいんだよそれで』『落ち込まないで元気出して！』『情けなくてみっともなくって恥ずかしい』『なーんにもできない役立たずの弱い奴』『それがきみのかけがえのない個性なんだから！』」

「『無理に変わろうとせず自分らしさを誇りに思おう！』『きみはきみのままでいいんだよ』」

「…おい！ 球磨川っ——」

グ　グ　グ

「！………球磨川…さん」

「『あはっ』『元気そうてでなにより高貴ちゃん』『その様子だとかつての破壊臣も随分丸くなったみたいだね！』」

「『いや実際』『僕はきみのことを本当に心配していたんだ』『きみが中学生の頃に壊した人間や壊した物体は二度と元の形には戻らないのに』『のうのと改心なんてフツーはできるわけないからさ』『でも高貴ちゃんがそんなことすっかり忘れて』『自分だけは幸せになれたみたいでよかったよ』」

「……………」

「『あは！』『という冗談でしたー！』『大丈夫だよ高貴ちゃん安心して！』『きみが壊した人物はぜーんぶ僕が戻しておいてあげたから！』」

「『こんな風に』」

そう言って球磨川は喜界島の胸をムンズと掴む

「！？ なっ…なにをっ……」

その瞬間ドンツと服が戻っていた（……）

「『女の子があんなボロボロになるまで戦っちゃダメだよ』『ところで』『きみの大切なあの人達は元気かい？』」

「！！ あなた…屋久島先輩と種子島先輩をしってるの…っ！？」

「『いや全然』 僕はきみの名前も知らないよ』 『でもふうーん』 『きみの大切な人の名前は屋久島と種子島っていうんだ』 『おぼえとこーっと』」

「……………」

「『ところで言うなら更にとこで！』 『真黒ちゃん』 『きみも怪我をしてるみたいだねえ』」
ガバァッ

「！！」

「『しかも随分古い傷だね』 『一年位前のものかな』 『なんならこれでも僕が戻してあげようか？』」

「遠慮しておくよ球磨川くん、これは僕が己の過ちに対して支払った代償であり僕が己の罪に対して受けた罰なんだから」

「『うわあ格好いいー』 『僕は中学生の頃も』 『真黒ちゃんのそういう格好よさに憧れてたんだよなー』 『けどごめーん』 『もう戻しちゃった！』」

「！！」

「『思い入れとかー』 『心がけとか誓いとかー』 『ごめーん』 『僕そういうのよくわからないんだー』」

「……………」

「みつそーぎ君それぐらいにしてあげなフォローは、ん？ どうしたの？ めだかちゃん？ なにか言いたそうな顔してるよ？」

「球磨川」

「折角の再開で折角の機会だ私にも言いたいことがあるなら言っておけよ」

「『んー？』 『僕が』 『めだかちゃんに』 『言いたいこと』 『ねえー』」

「『別にないけど。』」

「『あー！』 『ひょっとして勘違いしてる？』 『僕がきみ達に会いに来たとか！』 『ここで待ち伏せしてたとか！』 『さ！』」

「『うわ恥っずかしいー』 『自意識過剰ー』 『どんだけ自己中な考

え方してんのきみ達!』『自分のことをそーんな重要人物だと思いつながら日々を生きてるんだおもしろーい』」

「…ならばどうして貴様がここにいる」

「一体何をしにここへ来たというのだ」

「『うんそうそうそれそれ!』『聞いてよめだかちゃん!』『僕は今とても困ってるんだ』『助けてよ!』」

「『実は僕今日付けでこの箱庭学園に転校してきたんだ』『だから理事長にご挨拶に行かなきゃいけないんだけど道にまよっちゃってさ』『よかったら理事長室がどこにあるのか教えてくれない?』」

「……………それを教えれば今すぐ消えてくれるのかな」

「『もちろん』『こんなところにもきみ達にも用なんてないし』」

「……………本当か」

「『しつこいなあ』『信用してよ』『僕を』」

「……………」

「おい待て黒神勝手に話をまとめるな」

「球磨川とやら――」

突然現れて随分傍若無人ではないか

事情は知らんが

黒神の旧友だか真黒くんの旧友だか知らんが

そこに張り付いてる連中の大半は普通なる俺のよく知る仲間なのだ」

『こんなものを見せられては王を引退した俺でも!さすがに仇を討たんわけにはいかんぞ』

「いやいや王様君? 球磨川君に仇を討とうとするなら一緒にやった私も討たなきゃダメだよ?」

「なっ! お前を!?!」

と震える王様君(笑)

「『まあまあ』『可憐ちゃん』『僕達が悪いわけじゃないけど』『気持ちかわからないでもないかもだし?』『じゃあこれでおあいこってことで。』」

ズンッ

頭に螺子を突き刺す禊君

「…分かったよ

これでおあいこだ」

ズシュッ

心臓に釘を刺し込む

「禊君理事長室までの案内は私が引き受けるよ」

「『ほんと』『たのむよ』『あ』『そういえばめだかちゃん』『今生徒会長やってるんだって?』『昔の僕みたいに』」

「ああ

昔の貴様を反面教師にな」

「『ふーん』『ま』『応援してるよ』『がんばってね』『んじゃ』『また明日とか!』」

――――――――――

「馬鹿な!

今何と言ったのですか球磨川くん!」

「『あはっ』『やだなあ』『別に二度言うほどのことじゃないですよ』『不知火理事長』」

「『この学園に巣喰う十三組アブノーマルの生徒を一人残らず抹殺します』『僕はそのためにこの箱庭クラスコに転校してきました』『だってあいっら』『気持ち悪いでしょ?』」

「『話を進める前に不知火理事長』『催促するようで申し訳ありませんが』『お茶をください』『今すぐに』『なにぶんここに来るまで随分道に迷っちゃったから』『のど』『渴いてしまいました』」

「あっ! 私にも貰えますか?」

実は居ましたイエイ

「……………」

「これは気の利かないことで失礼しました

すぐに淹れますから少々お待ちください」

「『ありがとうございますっ』」

「ありがとうございます！」

「『んっ』『おいしっ』」

「…では聞かせていただきましょうか球磨川くん

『十三組の生徒を一人残らず抹殺するために転校してきた』という先ほどの言葉の真意を」

「『はっはっは』『真意も何も！』『変に深読みせずにそのまま受け取ってもらって結構ですよ』」

「球磨川くん

あなたは自分がどうしてこの箱庭学園に招かれたのか――

ちゃんとわかっていますよね？」

「『誰も悩むこともなく誰も困ることもない平等で平和な世界を作る！』『その素晴らしい思惑に僕は大きい共鳴しますし協力も一切惜しみません』『ただどうでしょう』『平等で平和な世界を作るためにわざわざ完全な人間を作るというのは』『僕にはちょっと効率が悪いように思えますね』」

「…ほう

ではどうすれば効率がよいのですか？」

「『えーっと』『何ごとも作るより壊す方が簡単ということですよ』『つまり』」

「『エリートを皆殺しにすればいいんですよ』『そうすれば世界は平等で平和です』『軍事兵器とかー悪法とかー不公平なシステムとかー』『ああいうのって基本エリートが考えてエリートが作るでしょ？』『だからそいつら全員消しちゃえばいいんです』『パーツとね』『その後にできる馬鹿ばかりの世界って』『きっと最高だと思えますよー』『なにせ馬鹿はなーんにも考えませんから』『悩まないし困らない！』『エリートがいなければ嫉妬にかられることもないし』『ご飯食べて寝てればそれでみーんな幸せですよ！』」

「アハハやっぱり禊君は面白いね

きみはそれだけ（・・・）が生き甲斐だからね♪本当面白い
私も協力してあげるよ面白そうだし」

「『やった』『これなら一人残らずエリートを抹殺できるね』」

「：わかりませんね球磨川くんどうしてそこまでエリートを目の仇にするのです

あなただって本来そちら側の人間でしょうに」

「『えー』『理由？』『理由ですかー？』『あ そうだ！』『エリートに両親が殺されたからってどうです？』『実の妹がエリートに攫われたからとかー』『親友だと信じていたエリートに裏切られたっていうのもえますよねー』」

「禊君！エリートに恋人を取られたとか過負荷らしくない？」

「『あ』『いいね』『それにしよう』」

「そんなこと許されるはずないでしょう！

できるかどうかという問題ではありません！

この箱庭学園は教育機関ですよ！？」

私の目の黒いうちはそんな真似——」

ドドンッ

螺子と釘が一斉に刺さる

「『へーえ』『じゃ』」

「目を白黒させてあげるよパンダみたいに！」

「『老人なら攻撃されないと思った？』」

「黒幕ぶってれば安全だと思った？」

「『僕達が可愛らしい顔立ちだから』」

「おしゃべりの最中なら死なないと思った？」

螺子を額釘は口の中に添えて

「『甘えよ』『甘いよ』

ドガッ

「はっ！？」

「『…が』『その甘さ』」

「嫌いじゃないよ」

「ご心配なさらずに理事長」

「『あなたのことはとりあえず』『愚か者の方に入れておいてあげます』」

「私達は愚か者と弱い者の味方です」

「『あなたの教育熱心さに免じて』『エリート以外の生徒には手出ししないと両親と妹と親友』『あと元恋人に誓って約束しますよ』」

「私達の敵はエリートだけです」

「『だからあなたには本当に感謝しています』『こんな敵^{エリート}だらけの箱庭に僕を招待してくれたことを!』」

「……………」

「『ま 見ててください』『あなたが全国から集めた自称異常者のエリート共を』『僕が螺子伏せてあげますから』」

「『あはっ』『とはいえクラスメイトが出揃うまではおとなしくさせてもらいますけどね』」

「理事長私の編入の件は済ましてくださいね」

今日はここに来る前に禊君と遊んで疲れてしまいました」

「『確かに』『ちよつと疲れちゃったから』『しばらくは様子見だね』」

「…………おやおや

遊んだ程度で疲れるようでは先が思いやられますよ球磨川くん悲惨くん

それにあのような大言はせめて黒神めだかを潰した後に言っほしいのですな

中学時代にきみを潰したというエリート中のエリート黒神めだかさんをね」

「『やだなあ』『挑発しないでくださいよ』『僕ってあまのじゃくだから』『逆に彼女と戦いたくなくなっちゃうじゃないですか』」

「そうですよ挑発しないでくださいよ
本気で潰しますよ?」

「『可憐ちゃんならできるだろうね』 僕としてもめだかちゃんとの決着は近いうちにつけますよ』 『リベンジする気なんて更々ありませんけど』 僕はあの子が今も昔も』 『大っ嫌いですから』」
そう言って理事長室を出ていく

すると出てすぐ横には小さな女の子がいた

「『んー』 『あれ?』 『どっかで会ったっけー』 『きみ』」

「あれじゃないですか毎朝洗面器で歯を磨く時にいつも会ってるのか」

「『そうなの?』」

「『…………… 初対面ですよ』」

初対面のぽつと出があたしの食事の邪魔をしないでくださいよ」

「箱庭はあたしの食堂だ

つまみ食い企んでんじゃねーよ

喰らうぞ!」

「『……………』 『こりゃあ驚いた』 『確かに初対面!』 『初めて会ったよ』 『まさかこの世に実在するとはね』 『なんていうか』 『そう』 『僕に似てる奴ってのがー』」

「適当なこと言ってんじゃねーよ

あんたに似てる奴なんかいいねーし

あたしに似てる奴もいいねーよ

わかってるんだろ?」

「『あははっ』 『まーそりゃそーだ』 『で』 『ひょっとしてきみもマイナス十三組?』」

「いえいえ

理事長の孫じゃありますが

あたしは一年一組のノーマルですよ」

「もつとも

おじーちゃんはおたしを見てマイナス十三組の設立を思いついたらしいですけどね」

「『……………』 『なっとく』 『ま 今度ゆっくり話そうよ不知火ち

やん』『でいいんだよね』『転校手続きって結構面倒でさ』『今本
当に立て込んでるんだ』」

そう言って禊君が去ったあと

「不知火ちゃん？」

「なんですか？」

「次は教室で会うと思うからまたそのときにね」

「？」

「バイバイ」

手を振りながら帰る

――――――――――

「ん…ここは…なじみちゃんか」

「正解だよ」

後ろから声がするから振り返る

「んんっ！…んんっ…ふ…クチュクチュ…クチュクチャぷはあ

…んんんっ！クチュクチュクチュクちゃんっふあクチュクチュクチ

ヤぷはあ…はあ…はあ」

「ふふ

一週間ぶりのキスだったからつい激しくなっちゃったよ」

「…はあ…はあ」

「あれ？ちよつとやり過ぎたかな？おゝい可憐くゝん」

「へっ？ちよつとまっれひからがひゃいらない」（※男の娘です）

五分位して

「まったくなじみちゃんものには限度があるんだよ」

「あははっごめんね、つい激しくなっちゃって」

「まったく

それで今日はどうしたの？」

「ああそうだったね今日はそろそろ球磨川君が着いた頃だと思ってね」

「ああうん、会ったよ」

「それと私もマイナス十三組に編入したよ」

「可憐ちゃんならそうすると思ったよ」

「今日はもうない？」

「うんそれくらいかな？ あああともう少ししたらそっちに行けるかもしれない」

「本当！それじゃ現実でもお話しようね」

「ふふ、そうだね」

「それじゃほかにないなら他愛のないお話でもしようか」

「そうだね」

この後はお話をして最後またキスを立てなくなる位までされて1日が終わった

第12箱（後書き）

暴食娘不知火ちゃんが登場しました！
久しぶりに安心院さんも出せたと満足です！

第13箱

どうも悲惨可憐です

今私は生徒会室に居ます

目の前にはめだかちゃん達がいるよ

まあ私を見ることも認識することもできないけどね

認識されることを否定して透明になる能力で穴埋めしたから

まあそんなことは置いといて

今善吉君は花に水をあげているよ

「あー平和だなー

俺はこうして花に水をやってる時が一番幸せだぜ」

善吉君？本気で言ってるならとある幻想殺しさんのようにその幻想をぶち殺したいよ

「…平和って

今の状況平和って言うのかな

あんな人が転校してきてるっていうのにさ」

「……………」

「私はこの先どーなるのか不安でしょーがないよ

そういえば『また明日』とか言ってたけど別に来ないねあの人」

あら？この子はなかなか純粋な子だね♪球磨川君は大嘘吐きなのに

「ふん

球磨川の言うことをいちいち鵜呑みにするな

馬鹿をみるぞ」

さすがめだかちゃん！わかってるね

「何せあいつは存在自体が嘘のような男だ

信じることも疑うことも球磨川に限っては無意味だよ」

そうそう疑うんじゃない駄目だよ受け入れる（…………）んだ

「黒神さん…」

「例えばだが喜界島会計

十三組はおろか一組から十二組まで全て調べてみても現在箱庭学園に球磨川禊なる生徒は在籍しておらんのだよ」

「……………どうということだ？」

「だから転校してきたというあの男の言葉自体がひょっとしたら嫌がらせのための嘘だったのかもしれないということだ

そうでなければあるいは理事会は球磨川禊を中心にまったく新しいクラスを編成しようとしているとか――」

鋭いね、正解だよ

「…しかし平和主義者のお前が珍しく先手を打つじゃねーかめだかちゃん

昨日の今日だったーのに球磨川についてもうそこまで調査済みとはな」

いやこれくらいやんなきゃ

もつとも調べること自体無意味だけどね

「当然だ

球磨川については先手を打って打ち過ぎるということはないよ

もつともとはいえ学園にあやつの侵入を許した時点で私は既に遅きに失しているのかもしれないがな」

「…ねえ黒神さん

中学生の頃あの人と一体何があったの？

正直見るとただ単純に敵対してたって風にも思えないんだけど――」

「…そうだな

どさくさでうやむやになっておったが貴様にはちゃんと話しておかんとな

ではそのあたり全員揃ったら話そうか」

コンコン ガラ

「おう噂をすればだ

今日は遅かったではないか阿久根書記――」

「すいませんめだかさんちよっとこの子

人吉君の妹と話し込んでしまして！」

「!？」

ン？あれ？どこかで見た気がする

「いやーきみもなかなか隅に置けないねー人吉君

こんな可愛い妹さんがいたなんて！

瞳ちゃんていうんだって？

真黒さんと気が合うわけだよーりで！

というかいくら兄妹でも似過ぎだろこれ！」

うーんどこだったかなあー

「：確かに似てるのは否定しませんが」

阿久根先輩

俺に妹はいません」

「え？妹じゃないって…じゃあこの子だれ？」

「お母さん」

「お母さん!？」ゴフツ

「お母さん!」にかっ

「ええええええええええええええっ!？」

コト

「ご無沙汰しております人吉先生

変わらずお元気そうで安心しました」

ん？先生？せんせい？あああああああ！人吉先生か！あの時

診察してくれた人か

思い出せてスッキリ

「だから先生はやめてって言うてるじゃんめだかちゃん

あたしはとっくの昔に引退した身なんだからさ☆」

「めだかさんは以前から知ってらっしゃったんですか

瞳ちゃ…人吉君のお母さんを」

「うむ

見ての通りお医者様でな

私が子供の頃通っていた病院に勤めてらして『免許を持ったBJ』
といえば

他の誰でもない人吉先生のことだったのだよ」

「免許を持ったBJ…？すごいのかすごくないのかよくわかりませ
んが…」

「昔の話だよ

それよりめだかちゃん

年頃の女の子がお肌を見せびらかすのはいただけないな！！」
ギューン

「！？」

「なっ…馬鹿な！」

「鬼瀬さんでもどうにもできなかったためだかさんの制服を…！？」

「……………お見事です人吉先生

さすがは元診療外科医

切ったり縫ったりは専門分野というわけですね」

「だーからそんなの昔の話だって

今のはお母さんのたしなみだよん」

「……………」

「…直接の担当医でこそなかったけれど

通院中は大層世話になってたからな

さすがのめだかちゃんも人吉先生には頭が上がりねーんだよ

っーかつーかつーかつーかつーかよお！

親が学校来んじゃねーよお母さん！

どんだけ恥ずかしいと思ってんだ俺が今！！

ありえねーモンスターペアレントだぜ！

何の用だ！俺は忘れ物なんかした覚えはねーぞ！！」

「こらこら母親にそんな口の利き方は感心しないなあ人吉君」

「ついさっきまで妹と勘違いしてたくせに黙ってる阿久根先輩！大
体母親なんて——」

「「？」」

「な 悪いことは言わないからやめとけて」

「そーだよー阿久根君の言う通りだよー」

お母さんは大切にしなきゃね善吉君！

ほらもーネクタイ歪んでるし髪はねてるし！身だしなみも満足に整えられないクセに反抗期なんて百年早い！」

「だああ構うな！これはこういう着こなしでこういう髪型なんだ！！」

昔から過保護過ぎんだよお母さんは！

俺もう高校生だぜ！？ちっとは息子を独り立ちさせろよ！！」

「背中をあーんな穴だらけにして帰ってきて構うなって方が無茶でしょ」

「う……………」

「申し訳ありません人吉先生

どうか善吉を責めないでいただきたい

善吉の負傷は上司たる私の責任です」

「いーのよめだかちゃん

それはもう済んだことだしね

問題はこれからのことでしょ」

むにゃむにゃはっ！今どの辺！？

「球磨川禊

あの子が再びあなた達の前に現れたなんて聞いたら母親はいてもたってもいられないわよ」

ほっ丁度いい場面だ

「……………球磨川のこととは人吉先生もお聞き及びでしたか

しかし善吉が話したとも思えませんが彼に監視でもつけていたのですか？」

「そりゃーねえー

なんたつてあたしは在職中病院で球磨川君とは会ってるからねー
一度問診しただけだけれど忘れられるわけがないよあんな大規模な過負荷を」

「そうですね

そもそも人吉先生はその時球磨川を見逃したことに責任を感じて医局を辞したのでしたね」

「そうなんだよねえ」

だから三年前あなた達の中学校で球磨川君が生徒会長をやつてると聞いた時には驚いたものだけれど

あの時も結局は逃げられちゃったしねー

そしてついでもうひとつ言うときあ

実は球磨川君だけじゃないのよ」

「…？ 球磨川だけじゃない…？」

「うんまさかと思って調べてみたら球磨川君だけじゃなくあたしが在職中個人的に目をつけていた過負荷が全員この箱庭学園に集結しつつあることがわかったんだ

そして少なくともそのうち二人は球磨川君に匹敵しかねない絶対値の持ち主——」

「！！」

「子供のケンカに親が出るみたいで格好悪いけどさ

だからもう恥ずかしいとか言ってる場合じゃないのよ善吉君

過負荷には過保護しかないの」

「ですが人吉先生

球磨川その他にもう一人いるのです」

あれ？ 原作にない展開？ 私のこと？

「もう一人？」

ここで登場して驚かせてあげよう

透明になる能力を否定して認識されるように穴埋めする

「もしかしてそれは私のことかな？」

「「！？」」

「あれ？ 皆どうしたの？ 私は最初からいたよ？ それこそ誰もいない時からね」

「めだかちゃんこの子は？」

「ひどいな～人吉先生忘れちゃったか？ 悲惨可憐ですよ？」

「悲惨可憐？んゝ思い出せないわ」

「仕方ないですねゝ最近あまりこの口調使ってないんだけどな」

《本当に覚えていないのか？》

「っ！この感じ…あの子か！」

《どうやら思い出せたようだな》

「たしか君は男の子だったはずよね」

《俺は今も男だぞ

女の姿をしてるのは男と教えたときの反応がおもしろいからだ》

「そう…君は球磨川君の味方？」

《そうだがそれが？》

「いえ聞いてみただけよ」

《そうか、おい黒神》

「なんですか悲惨先輩？」

《俺と戦うなら容赦せんぞ？》

「分かりました」

《うむ、そろそろよいな…んっん！》

「それじゃ皆バイバーイ」

瞬間移動でその場を後にする

瞳side

「これは大変なことになったわね」

「お母さんは可憐先輩知ってたのか？」

「知ってるもなにもあの子も私の患者よ」

「なるほどな」

「やっぱり毎日学校に来るべきね」

「はあ？ってまさか！

てめえ保険医として箱庭学園に赴任してくるつもりじゃねーだろうな！？」

あとは原作と同じやり取りがあった

瞳 s i d e o u t

私はあのあと旧校舎前に来ていた
ざっざっ

「ん？あっ！あなたが江迎さん？私は悲惨可憐と同じ過負荷どうし
よろしく」

と言って握手のための手を差し出す

「あなたが可憐さんですかよろしくお願いします」
そう言って握手する

「？腐らない？」

「それが私の過負荷だからね旧校舎入ろう？」

「はいそうですねわかりました」

ふふっ次は真黒くんかぁ楽しめるかな？

そんなことを考えながら旧校舎に入っていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2432y/>

優等生で問題児

2011年11月20日17時00分発行